

滋賀県平和祈念館 第16回企画展示

八日市 いまむかし ー飛行場があった街ー

(会期：平成29年1月11日～4月23日)



チラシ表面



チラシ裏面

ごあいさつ

八風街道と御代参街道が交差する八日市は、古くから商業の街として発展してきました。ときわ通りから金屋大通りの界限には、大正時代まで古い形の市場が並んでいました。

近江鉄道と湖南鉄道（現近江鉄道八日市線）が開通し、八日市駅・八日市口駅（現新八日市駅）が設置されたのをはじめとして、やがて大正11年（1922年）に陸軍八日市飛行場が開設されると、八日市は急速に近代的な街へ発展してゆきます。

今回の企画展示では、陸軍八日市飛行場と、飛行場とともに発展した八日市の街について紹介します。

平成29年1月11日

滋賀県平和祈念館

プロローグ 八日市 いまむかし



パナー写真：空から見た八日市の街並み（大正末期ごろ）

〔出雲一郎さん提供〕

中央を蛇行しながら上下にのびる家並は御代参街道（本町通り・栄町通り）。その左にまっすぐのびる軌道は近江鉄道。これらと交差して横にのびる道が八風街道（金屋通り）。延命公園（左手からのびる尾根上）、野々宮神社（中ほど右よりの森）、旧八日市小学校（その右隣の校舎）が見える。

八日市 いまむかし

八風街道と御代参街道が交差し、蒲生郡と神崎郡の郡界に位置する八日市では、鎌倉時代から市場が開かれていました。中世の市場は、交通の要衝にあって、平等な交易のために権力者の権限があいまいになる境界域で始まることが多いといえます。八日市の街はこの市場が母体となって発展しました。

八日市の名の由来は、八の付く日（のちに二の付く日、五の付く日が追加）に市場が開かれたことにあります。市場の中心はときわ通りから金屋通り西部の中央商店街あたりで、戦後になっても仮設屋根や市小屋で物を売るという、古い市場の形が続けられていました。

明治時代に開通した東海道本線は八日市から外れてしまいましたが、地元政財界の尽力で近江鉄道と湖南鉄道（のちに八日市鉄道、近江鉄道八日市線）が開通しました。さらに、沖野ヶ原飛行場が地元の力で開設され、これをもとに陸軍八日市飛行場が誘致されました。

今回の企画展示では、陸軍八日市飛行場と、これとともに発展した八日市の街、そして飛行場と地元の人々とのかわりについて紹介します。



パナー写真：沖野ヶ原飛行場と荻田常三郎〔個人提供〕

（右）フランス留学中の荻田（右）と師リゼー

（左）上から順に、第二鷲風号、沖野ヶ原を飛ぶ荻田操縦の鷲風号、修理後の第二鷲風号（鷲風飛行学校前）

八日市に陸軍飛行場が開設されるまえには、その前身として日本初の民間飛行場である”沖野ヶ原飛行場”がありました。沖野ヶ原飛行場の開設には、滋賀県愛知郡愛荘町出身の民間操縦士である荻田常三郎が深くかかわっています。

明治 36 年（1903 年）、アメリカのライト兄弟が世界で初めて動力飛行機の飛行に成功しました。これより早く、二宮忠八は独自に動力飛行機を構想していましたが、実際に日本で最初にフランス製動力機による飛行を成功させたのは明治 43 年（1910 年）の徳川好敏でした。こうして飛行機熱が高まっていた大正 2 年（1913 年）、荻田は操縦技術習得のため、フランスへ留学したのでした。

”鷲風号”と名づけられたモラーヌ・ソルニエ機を購入し帰国した荻田は、第 1 回飛行大会（兵庫県鳴尾競馬場）で優勝。京都深草練兵場で飛行活動が続け、大正 3 年（1914 年）に故郷へ訪問飛行を実施。この時、整備されたのが”沖野ヶ原飛行場”でした。

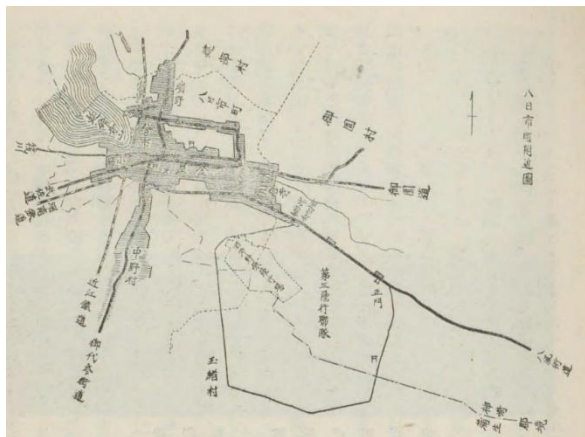
沖野ヶ原飛行場—荻田常三郎と鷲風号—

荻田常三郎は明治 18 年（1885 年）、愛知郡愛荘町島川の生まれ。陸軍を除隊したあと、京都と福井の呉服店を継ぎましたが、大正 2 年（1913 年）フランスの飛行学校へ留学しました。徳川好敏大尉が日本初の動力機飛行に成功した 3 年後でした。

荻田は、8 か月で万国飛行一等免許状を取得し、フランス製のモラヌ・ソルニエ機(複座単葉機)を購入して大正3年(1914年)6月に帰国。直後の飛行競技会で優勝し、飛行家として名をあげました。京都深草の飛行会では愛機に“翦風号”の名を賜り、同年10月22日には沖野ヶ原から郷里へ訪問飛行を成功させました。そして、これを機に沖野ヶ原に民間飛行場の建設がすすめられました。

ところが翌年1月、荻田は試験飛行中に墜落死。翦風号も大破しました。飛行機を修理して第2翦風号と名づけ、外国人飛行士による飛行会を催したこともありましたが、主人公のいない飛行場は活用のあてを失いました。

※沖野ヶ原飛行場は現在の聖徳中学校の東、ひばり通り付近にあたります。



『近江神崎郡志稿』(滋賀県神崎郡教育会)より
「旧沖野原飛行場」とある。



翦風号模型

沖野ヶ原の翦風号試験飛行100周年(平成26年(2014年))

に安田晴彦先生が制作、小学校へ寄贈された模型です。

〔東近江市立八日市南小学校所蔵〕

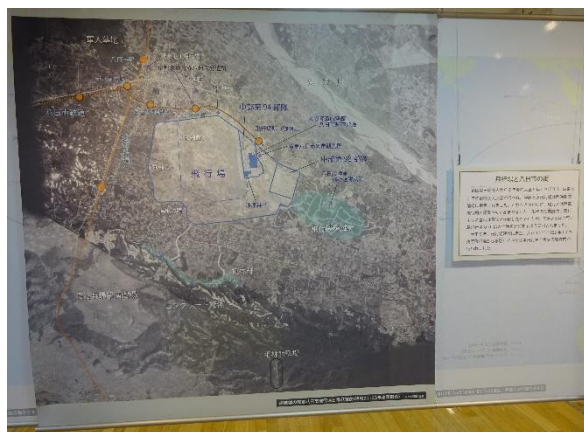
第1章 陸軍八日市飛行場

八日市飛行場は、日本で初めての民間飛行場である「沖野ヶ原飛行場」を前身として整備されました。大正6年(1917年)には、滋賀県で陸軍の特別大演習が行われ、沖野ヶ原飛行場も利用されました。

その後、陸軍に航空大隊が編成され、地元の陸軍飛行場誘致活動もあり、航空第三大隊が八日市へ配属されました。同11年(1922年)1月11日、航空第三大隊の開隊式が挙行され、名称も「八日市飛行場」へと改められました。八日市の街は飛行場とともに発展し、毎年4月3日に開催される「飛行場祭り」は、地域最大の行事となり、多くの一般の人が訪れるようになりました。

昭和13年(1938年)に改称された飛行第三戦隊が、同17年(1942年)3月に樺太へと移動したのちは、飛行兵(操縦)と航空兵(整備)の教育部隊と、航空機の整備を行う航空分廠が置かれました。同20年(1945年)には、航空部隊としては第8航空教育隊・飛行第244戦隊等、陸上の部隊としては第254飛行場大隊・独立機関砲第56中隊等が置かれ、出撃の際の中継基地として、重要な役割を果たしました。

終戦直前の昭和20年7月24日・25日には、飛行場や八日市周辺がアメリカ軍機による攻撃を受け、死傷者が出ました。終戦後、飛行場は進駐軍に引き渡され、飛行場としての歴史を閉じました。



パナール写真：終戦頃の陸軍八日市飛行場と周辺施設

(昭和22・23年米軍撮影) 〔国土地理院提供〕

飛行場と八日市の街

荻田常三郎死去から2年後の大正6年(1917年)、湖東地方で陸軍特別大演習が行われ、沖野ヶ原飛行

場は臨時離着陸場に指定されました。これをきっかけに、地元では陸軍飛行場の誘致運動が高まりました。現代の企業誘致と同じように当時は軍隊を誘致したのですが、陸軍からは沖野ヶ原飛行場の10倍の土地を寄付するよう要求されました。

大正9年（1920年）、飛行場建設に着工。大正11年（1922年）に各務原飛行場から移駐してきた陸軍飛行第三大隊の開隊式が行われました。



八日市飛行場第三聯隊（昭和初期）

〔個人提供〕



八日市飛行場の全景（昭和初期）

〔個人提供〕

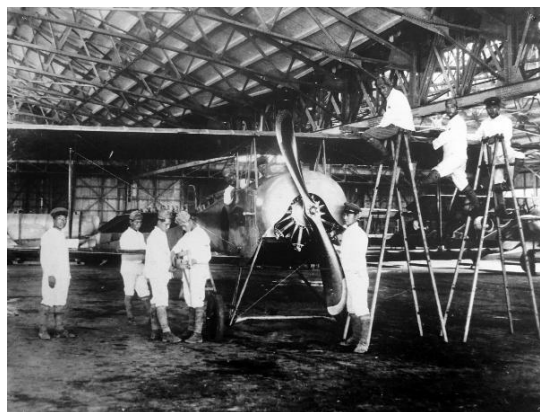


格納庫裏（昭和初期）

〔出雲一郎さん提供〕



格納庫前に整列する飛行機（昭和初期）〔出雲一郎さん提供〕



格納庫内部の修理作業（昭和初期）

〔八日市図書館提供〕



滑走路に整列する飛行機（昭和初期）

〔出雲一郎さん提供〕



滑走路に整列する飛行機（昭和初期）

〔出雲一郎さん提供〕



雪上の訓練（昭和初期）

〔出雲一郎さん提供〕



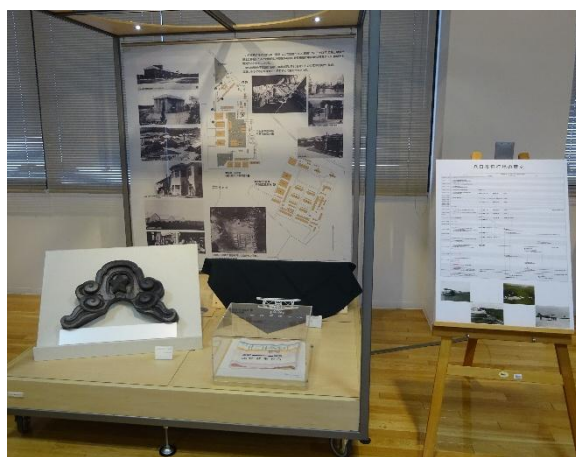
大中の湖上空を飛ぶ飛行機編隊（昭和初期）

〔個人提供〕



飛行場上空を飛ぶ飛行機（昭和初期）

〔出雲一郎さん提供〕



パナール写真：八日市飛行場の内部〔出雲一郎さん ほか提供〕

八日市飛行場は「飛行第三聯隊」として設置された。昭和 17 年（1942 年）に第三聯隊が津太に移駐したあとの施設に中部第 94 部隊、新設施設に中部第 98 部隊が入り、操縦士を教育する役割をになった。

第 94 部隊の平面図は昭和 17 年作成図、第 98 部隊のものは空中写真から作成。写真は 4・6・9 のほかは大正～昭和初めに撮影されたもの。

展示品：飛行場で使用されていた鬼瓦、風呂敷「八日市飛行隊」、タオル「除隊記念 八日市飛行隊」



八日市上空の訓練機（昭和 10 年代？）

〔個人提供〕



布施池上空を飛ぶ飛行機編隊（昭和初期）〔出雲一郎さん提供〕



八日市飛行場の歴史

	できごと	飛行部隊	駐屯部隊変遷（→：移駐、⇨：編成替え及び改称）	教育隊
大正 3年（1914年）	10月 飯田第三師、沖野が原で飯田号の就航飛行に成功。			
大正 4年（1915年）	1月 飯田氏が京都隊隊長として遷移。6月 国内初の民間飛行場「沖野が原飛行場」が完成。			
大正 6年（1917年）	11月 陸軍特別大演習の座頭寺陸橋に指定される。これを機に、並平飛行場の建設運動が盛り上がる。			
大正 9年（1920年）	8月 飛行場建設に着手。12月 航空第三大隊が各務原飛行場へ編成。			
大正10年（1921年）	11月 航空第三大隊が八日市飛行場に移駐。	航空第三大隊		
大正11年（1922年）	1月 八日市飛行場で陸軍第三大隊の開隊式を挙げる。7月 飛行第三大隊と改称。	飛行第三大隊（本部・戦術中隊(3個)・材料隊）		
大正12年（1923年） 大正13年（1924年）				
大正14年（1925年）	1月 飛行第三大隊と改称。	飛行第三大隊（本部・偵察中隊(1個)・戦術中隊(2個)・材料隊）		
昭和元年（1926年） 昭和 2年（1927年）		飛行第三大隊（本部・偵察中隊(3個)・材料隊）		
昭和 3年（1928年） 昭和 4年（1929年） 昭和 5年（1930年） 昭和 6年（1931年）	9月 演習中隊			
昭和 7年（1932年）	2月「赤十字団」建団 6月「赤十字団」へ戦術中隊1個が別隊軍飛行場に派遣される。	飛行第三大隊（本部・戦術中隊(2個)・材料隊）		戦術中隊1個を清水へ派遣
昭和 8年（1933年） 昭和 9年（1934年）	戦術中隊を偵察中隊に変更し、海軍航空で生じた欠隊を補充。	飛行第三大隊（本部・偵察中隊(3個)・材料隊）		
昭和10年（1935年）	12月 飛行第九大隊を創設。	飛行第三大隊（本部・偵察中隊(3個)・材料隊） 飛行第九大隊 創設		
昭和11年（1936年） 昭和12年（1937年）	2月 2.26事件 7月 日中戦争はじまる。			
昭和13年（1938年）	6月 第九大隊は第九戦隊と改称し、制空会軍へ移駐。 8月 第三戦隊は第三戦隊と改称。 飛行中隊と地上部隊を分離編成したことにより、飛行中隊と大隊隊軍航空隊八日市分隊が創設された。	飛行第三大隊（戦術中隊(1個)・戦術練習隊(1個)） 飛行第九大隊	飛行場大隊（本部・戦術中隊(1個)・整備中隊(1個)） 大隊隊軍航空隊八日市分隊	制空会軍へ移駐
昭和14年（1939年） 昭和15年（1940年）		飛行第三大隊（戦術中隊(1個)・戦術中隊(3個)）		
昭和16年（1941年）	2月 飛行第八航空教育隊（通称中部第98部隊）が松山江から移駐。 本隊は整備員の教育隊。 12月 アジア太平洋戦争はじまる。			飛行第八航空教育隊（通称中部第98部隊）(2個中隊)
昭和17年（1942年）	協賛士を大量養成するための教育体系整備にともない、第104教育飛行隊（通称中部第98部隊）を創設。 2月 飛行第三戦隊は、松本へ移駐（のちレイテ沖で没）。 6月 ミッドウェー海戦	飛行第三戦隊（通称第98部隊）		松本へ移駐
昭和18年（1943年）	2月 ガダルカナル島撤退		飛行場大隊（本部・戦術中隊(1個)・整備中隊(1個)）	
昭和19年（1944年）	第104教育飛行隊が第四教育飛行隊に改称。 6月 マリアナ沖海戦 7月 リンパウ島空襲 10月 米軍レイテ島上陸			第104教育飛行隊（戦術中隊(1個)・整備中隊(1個)） 第四教育飛行隊（戦術中隊(1個)・整備中隊(1個)） 第五教育飛行隊（戦術中隊(1個)・整備中隊(1個)）
昭和20年（1945年）	第104教育飛行隊が第五教育飛行隊へ移駐。 2月 東京・名古屋・大阪大空襲 沖原の空襲 6月 これと相次いで特攻隊が八日市に降参し、特攻隊。沖原特攻隊を支援した飛行第244戦隊が八日市に降参。 7月 第八航空教育隊は戦術中隊に、分隊も二員が遺棄されていた。 7月下旬に、米軍艦隊の空襲を数度にわたって受ける。 8月 終戦。特攻隊河津中尉が竹生島近くで自決。 10月 10月10日に米連陸軍に引き渡しが行われ、場内で飛行機が焼却された。	飛行第244戦隊	飛行場大隊（本部・戦術中隊(1個)・整備中隊(1個)） 大隊隊軍航空隊八日市分隊	第五教育飛行隊（戦術中隊(1個)・整備中隊(1個)） 第八航空教育隊（通称中部第98部隊）(2個中隊)

飛行場祭り

飛行場内に創祀された沖原神社の例祭にあわせ、毎年4月3日に開隊記念行事として飛行場祭りが開催されました。この日は飛行場が開放され、飛行場がまじかで見られたほか、航空ショーや落下傘の降下実演などが行われました。

また場内では、隊員の仮装行列や演芸会、延命新地の芸者の踊り、地元青年団の運動会や伝統行事の大風あげなども行われ、出店が出されるなどして、軍隊と地元住民との親しい交流会となっていました。

【体験談：飛行場祭り】

Yさん ほか

毎年4月3日には八日市飛行場で飛行場祭りがあ

りました。子どものころから飛行機が大好きで、4年生のころから下田村（現湖南市）から自転車で見物に行きました。代表的な飛行機がならんでいて、軽爆撃機の宙返り飛行なども行われました。

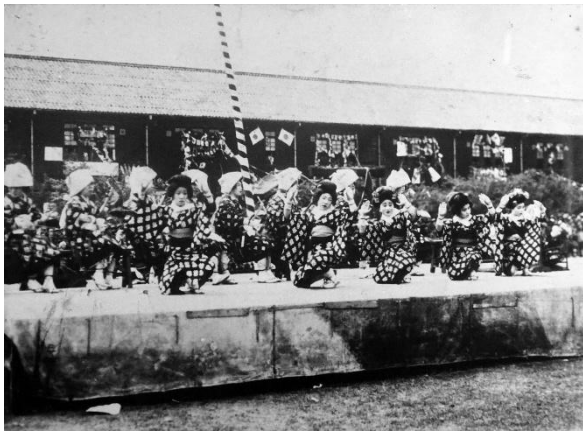
【のちに八日市の第98部隊へ入隊したYさん】

近くの見学者や、全国から入営者を訪ねてくる人達でたいへんなにぎわいでした。京都の撮影所からも慰問に来てましたな。若いころの森光子（女優）も来ていて、その写真を残してます。八日市の新地からもたくさんの芸妓たちが来てました。

【表門前の料理屋「うを民」のOさん】

普段は出入りできない格納庫も一般に公開されて、兵隊さんの演劇や相撲大会、出店がならんで、八風

街道は歩けないほどの人並みでした。うちから出した飲み物ではニッキ水が一番気で、飛ぶように売れました。〔表門前の食堂「奥村屋」のTさん〕



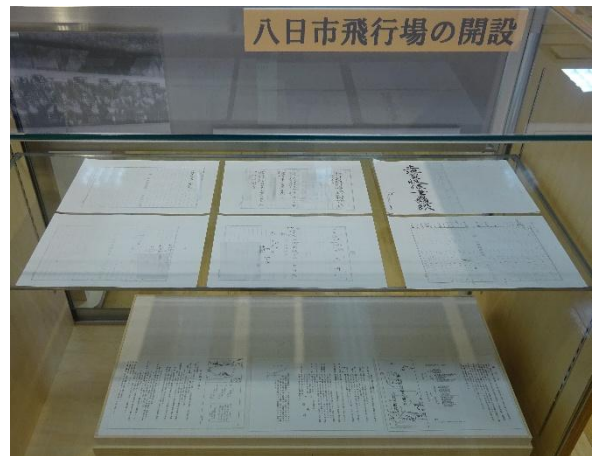
飛行場まつり（新地芸者の踊り）〔八日市図書館提供〕



軍用機を見学する市民〔個人提供〕



兵舎前のディスプレイ〔個人提供〕



上段：「土地買収二係ル書類綴」（複製）

陸軍八日市飛行場建設時の買収記録、大正9年

下段：「飛行第三連隊参観の葉」（複製）



上：『八日市と飛行場』（復刻版）

下：絵葉書袋「八日市飛行場 地鎮祭記念絵葉書」、

飛行場地鎮祭の絵葉書 工事着工を祝って、八日市の街から繰り出した山車の写真

【体験談：八日市鉄道】

M子さん・Kさん

八日市鉄道に入らしてもろたんは昭和13年(1938年)か14年かな。今の新八日市駅の2階が事務所やったん。事務所づとめで、各駅から毎日の売り上げが寄ってきますやろ、それを集計したり、国鉄との連絡切符があったからどれだけ国鉄に払わんならんとか、その勘定してましてん。

飛行場の面会客とか貨物はぎょうさんありました。飛行機とか、ガソリンはドラム缶で。それからパルプにする木材をぎょうさん運ばはった、山から切り出して中野駅からようけ送ったさかいなあ、軍需景

気いのかな。

部隊を移動しはる日は国鉄の客車を引き込んできて、兵隊さんを夜通しで運んだわ。手紙送ってくれ、いうて内緒で渡さはった人もあってね。憲兵が見てるから。それポストへ入れてあげるの。

志願兵で若い人もぎょうさん来はったけど、電車で飛び込んで死なはった人も2、3人あったな。ほらほんでに辛かったんやろ。【M子さん】

八日市鉄道は近江八幡から御園まで。八幡から新八日市へ入って、スイッチバックして行きます。途中、土手にして坂になって近江鉄道の上を渡ってたんや。ほんで中野駅、河合寺駅、飛行場駅（のち御園駅）で終点。

私は（昭和）16年（1941年）に入って、駅で出札やとか貨物の取扱いしてました。汽車が走とったんやけど、石炭がなくなると割木をたいてはった。ほと馬力が落ちるで（近江鉄道を渡る）坂が上がりへんのや。ほれていったんバックして、貨物車一つおいて、いきおいつけて上がったんやな。

切符は配給やった。東京あたりやったら一駅3、4枚しか割り当てがないんで、前の日から頼まんと買えへん。近いところはようけあるけど、石山でも割り当てでしたな。

八日市から八幡までは24銭で、24～25分かった。兵隊は2割引。召集は5割引で、証明書見せはると切符に兵のハン押すんです。

兵隊さんの夜間輸送が一番思い出ありますわ。兵隊さんは御園から歩いてきて、新八日市で定員いっぱいに乗せてな。絶対もの言わはらしません。国鉄から客車入れて、蒸気機関車2台を前後してひっぱるんです。警笛鳴らさんと行けちゅうんやから。前照灯かて暗くして、前なんてなんやわからへん。一晚に3便くらい動かさななりませんでしたな。

【Kさん】

※八日市鉄道（もと湖南鉄道）は大正2年（1913年）に近江八幡―新八日市間、昭和5年（1930年）に新八日市―飛行場が開通。19年（1944年）に近江鉄道と合併するまで、新八日市―八日市間は連絡してなかった。



上：「八日市鉄道沿線案内」（複製）

下：「八日市鉄道列車時刻表」



第2章 飛行場がある街 街のなりたち

おそくとも650年ほど前には開かれていた八日市の市場は御代参街道と八風街道の交差点にあり、その後も市場町としてさかえて近代をむかえました。城下町や門前町に由来する街が多いなか、八日市のような古い市場町は多くありません。

ときわ通りと金屋通りの地下を流れる筏川沿いが、古くからの市場の中心です。筏川は蒲生郡と神崎郡の境界でもありました。隣接する市神神社が市場の守り神です。

街の名のとおり、八の付く日（のち二・五・八の日）に市が開かれ、屋根だけの露店に商品を並べていたようです。江戸時代には「市屋形（市小屋）」と呼ばれる小店舗が並ぶようになり、いまでもときわ商店街にそのなごりが見られます。

明治期には、金屋通りで開閉式の固定式板屋根が設置され、そこで露店を開きました。昭和9年（1934年）に筏川が覆蓋されると移動式テント屋根に代わりましたが、市場の風景は戦後しばらくまで見るこ

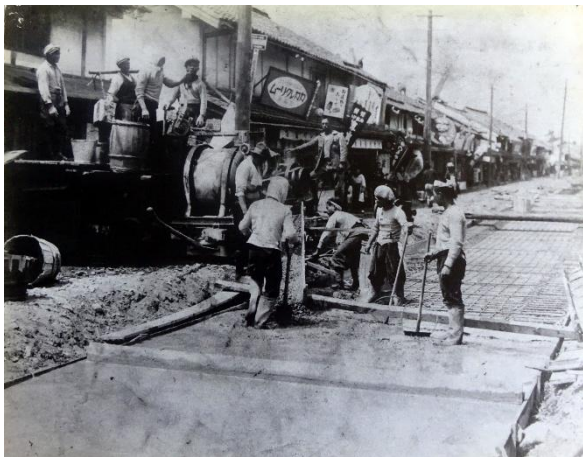
とができたようです。

八日市の街は、この市場から街道沿いに周辺部へ拡大していきます。陸軍が八日市駅から表門までの軍用道路を整備し、戦後は八日市市が街路を整備すると、街はさらに外側へ拡大してゆきました。



本町通り・金屋通り交差点の筏川にかかる大橋

〔八日市図書館提供〕



筏川の覆蓋工事（昭和9年）

〔八日市図書館提供〕



「近江八日市町絵葉書」



八日市飛行場関連絵葉書（各種）



飛行場と街の人々

八日市飛行場には飛行第三大隊（のち第三聯隊）が駐屯していました。確かな記録はありませんが、昭和10年（1935年）ごろには600人程度の将兵と軍属が働いていたようです。

街で下宿した将校と営内で暮らす兵士の食糧や生活用品、飛行場が必要とする燃料などの軍需物資、そしてその運送など、飛行場が関係する需要はたいへん大きいものでありました。場内の材料廠・航空廠八日市分廠は、地元住民にとって条件の良い働き口でもありました。

市場町として発達した八日市は、東海道本線から外れたことで経済の落ち込みが心配されましたが、陸軍飛行場の誘致が成功したことによって立ち直ることができたのです。近江八幡―八日市を結ぶ八日市鉄道（もと湖南鉄道）も、昭和5年には表門前の「飛行場駅（のち御園駅）」までのびました。

表門前の八風街道沿いには料理屋や洋品店がならび、なかには飛行場の「酒保（売店）」へ出店するところもありました。飛行場に入出入りする業者は数多く、「御用達組合」を作っていました。映画館、ビリヤード、カフェーといった遊興・風俗店は軍関係者でにぎわい、八日市駅前の花街「延命新地」は県内

有数の規模と売り上げを誇りました。



戦中戦後の髪型（ウィッグ）

翼賛型1号・2号・3号、震災刈り

飛行第三聯隊除隊記念 徳利・盃、創立記念盃

将校が下宿に残した書籍

「勝つために理髪も一役」『理容厚生』第38巻第1号



飛行第三聯隊除隊記念 徳利・盃、創立記念盃

【体験談：翼賛刈り（床源）】

戸嶋源一さん

【昔の八日市】

金屋通りのまん中は筏川が流れてました。自動車は通れません。筏川には大きな柳の木がありましてね、川いっぱい枝が下がってました。それをまとめて、サーカスの真似してぶら下げて、八日市から金屋の側へ渡ったもんです。筏川の水をせき止めて、いろんなことして遊びました。

【床源】

兵隊へ行くまでは、父と二人で散髪屋（「床源」）をしてました。当時は翼賛刈りゆうてね。10 cmも伸ばさない刈り方です。ポマード付けて七三分けなんてあのご時勢ではさせてもらえません。子どもはもちろん丸刈りです。

*翼賛刈り

翼賛型1号：左で七三分け。裾まわりは短く刈り上げ、フロントは6 cmまで。

翼賛型2号：上段部は6 cm以下。下段部はごく短く。後頭部は上部まで短く刈り上げ。

翼賛型3号：上段部は6 cm以下。下段部は少し長めに刈り上げ。

震災刈り：分け目の小さい方を短くして、分髪しやすくした。戦後に流行。

復員後、戸嶋さんは「戸嶋理容所」という名にして店を継ぎました。



本町通り

〔八日市図書館提供〕



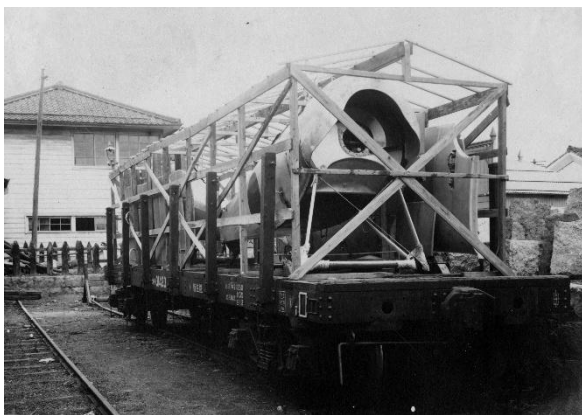
金屋通り

〔八日市図書館提供〕

筏川覆蓋後の様子です。



八日市駅前（陸軍御用達の薪）〔八日市図書館提供〕



列車による飛行機の運搬（八日市駅）〔出雲一郎さん提供〕



八日市郵便局 〔八日市図書館提供〕



八日市の商店（『八日市と飛行場』より）

飛行場が開設された大正 11 年（1922 年）、奥井清弘氏が著した八日市と飛行場を紹介する小冊子『八日市と飛行場』には、冊子刊行に協賛（寄付？）した八日市の街の多彩な商店が名前を連ねています。この時代の八日市の活気うかがえます。

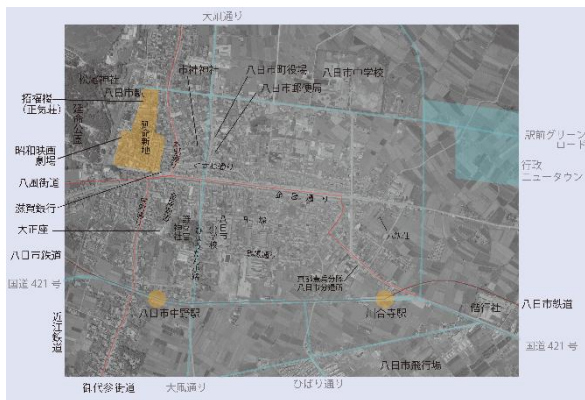


パナ写真：戦前の八日市の街（昭和初期～20 年ごろ）

八日市中学校、八日市郵便局、本町通り、ときわ通り、近江鉄道八日市駅など

〔八日市図書館提供〕

日野屋酒店看板、一升徳利、三升徳利、飛行せんべい箱ラベル など



水色部分は戦後に新設・拡幅された道路と行政ニュータウン
(写真は昭和36年(1961年)撮影〔国土地理院提供〕)



左：せんべい焼き型、
右：一二三堂の菓子型（襟章、鉄兜、表門）

飛行場のみやげ物

八日市の街では、飛行場に関してさまざまな商売が行われていました。

表門前ではうどん・そば・飛行場饅頭などを売る奥村商店と、絵はがきや徳利などの記念品を売る店が並び、「飛行場の二軒」と呼ばれて職員や面会者に利用されました。

街では「大飛行正宗」と銘打った清酒、飛行煎餅や第三聯隊にちなんだ菓子が売られていました。

陸軍飛行場は八日市の「名所」でもあったのです。

清酒 大飛行正宗（日野屋）

陸軍八日市飛行場が開設すると同時に、金屋の酒店日野屋では清酒「大飛行正宗」を発売しました。看板は2代目店主麻原傳治郎さんが作ったもので、中央のロゴマークは陸軍をあらわす星マークと飛行機のエンジンの正面観をイメージしたらしいデザインをあわせています。

麻原久子さんが日野屋に嫁入りされた昭和14年

(1939年)には「大飛行正宗」は販売されていなかったそうで、戦時下の飛行場に対する自粛の影響があったのかもしれません。

【体験談：飛行場と街の人々（表門前の料理屋）】

Tさん・Oさん

大正10年(1921年)ごろ、八風街道沿いに兵隊相手の食堂「奥村屋」を父が開きました。飛行第三大隊にはまだ350人くらいしかなくて、そのうち大きくなるやろと期待したのです。まもなく小寺さんが移ってきて、飛行場を訪ねてくる人に絵はがきや徳利、記念品を売ってました。この2軒は「飛行場の二軒屋」と呼ばれてました。

奥村屋ではうどん・そばを食べさせていましたが、餅やまんじゅうに飛行機の焼き印を押した「飛行場饅頭」も作って売ってました。

兵隊の残飯を払い下げてもらう権利を取って、家で鶏とブタを飼ってました。父は営門に入るための門鑑を持っていて、毎日大八車を引いて残飯をもらいに行きました。私も手伝いについて行って、父と裏門から門鑑を見せて入りました。

大阪や京都から入営者を訪ねて歩いてくる人がいて、飛行場の場所をたずねられることはよくありました。演習のために不在で面会できなかったこともあって、「一晩とめてください」と頼む人もいました。そういう人を、父は奥の部屋に泊めてました。

【「奥村屋」のTさん】

小学校入学の翌年、昭和10年(1935年)に表門前に引っ越してきました。家は料理屋「うを民」です。飛行場内の酒保(売店)にも店を出してヨウカンを売ってました。下士官集会所(酒保の2階)と将校集会所で昼食の賄いと、偕行社(将校の厚生施設)の賄いもしました。

酒保では、ほかにも志賀熊さんがうどんとぜんざい、魚竹さんがお好みあられ、福寿軒さんが大福餅と田舎饅頭を売ってました。酒保には当番兵がいて、毎日商品一つを検食することになってました。商品はすべて一つ5銭で、お好みあられが一番よく売れていて、ヨウカンはあまり売れなくて並べておくだけということがよくありました。それでも店番に行くと父が5銭のお駄賃をくれました。

下士官の昼食は三段積みの弁当で 18 銭。集会所に食べに来られました。将校集会所は別棟です。前庭と池があって入口には階級順になった下駄箱がありました。昼食はぜんぶ皿盛で 25 銭。ここで皿に盛り付けると当番兵が席に運びます。食事中は靴脱ぎ場で、当番兵が将校の長靴を一生懸命磨いてました。磨き方が悪いとケチをつけられて、ビンタされている兵隊の姿をよく見ました。【「うを民」のOさん】

【体験談：将校の下宿】

Oさん・H子さん

飛行場の将校は、家族持ちの人は東本町や金屋の将校官舎で暮らしたはりました。単身の人は町内で下宿。東本町の八紘荘アパートには単身の将校と古参の下士官が住んでました。【「うを民」のOさん】

東京で被災した灰谷登志子さんが八日市へ帰ってくると、実家には将校が下宿していました。

(昭和) 20 年 (1945 年) 5 月ごろに帰ってきてるやろ。兵隊さんは 3 人くらい居はったかな、入れ替わりしながら。この座敷に椅子とテーブルと、オルガンと電気蓄音機おいてあって、夕方兵舎から帰ってきたら夕食食べさせて、それからここでくつろがはるねん。軍歌を歌いはると妹がオルガン弾いたり。その人らは優雅なもんよ。

私は毎日、ほうぼうへ食べ物の買い出しに行ったんや。野菜でも芋でも豆でも、そらもう手あたり次第、物々交換やった。

【H子さん】

将校が下宿していたOさんの家には、その人が読んでいた図書が残されていました。

【体験談：いたや旅館・招福楼】

Kさん・Nさん

昭和 16、7 年 (1941・1942 年) からいたや旅館の 3 階に陸軍航空審査部が滞在して、新エンジンの試験飛行の結果をまとめてました。窓からアンテナを出して、試験飛行機と交信してたようです。常に 5、6 人、多いときは通信や操縦担当の将校 14、5 人が宿泊してました。結果を各務原へ持ち帰ったり、暇なときは遊郭へ遊びに行ったりしてました。旅館が当時珍しい 3 階建だったことと、こういう所はかえって機密漏洩のおそれが少ないと考えたんでしょう。

【のちに第 98 部隊に所属したいや旅館のKさん】

招福楼はもとは貸座敷業をしてました。戦争がはじまってからも将校さんがよく遊びに来ましたし、八日市の旅館のご主人たちもよく来られてました。新しい部隊が来ると旅館に泊まるので、景気が良かったんでしょう。

昭和 19 年 (1944 年) に置芸者が廃止になって貸座敷業が続けられなくなったので、旅館業の許可をとろうとしてたんです。そしたら、軍の方から 98 部隊の将校宿舎を引き受けてほしいと依頼がありまして、「正気荘」という宿舎になったんです。【動員で八日市分廠にいたことのある、招福楼のNさん】

【体験談：八日市分廠】

宮本喜造さん ほか

昭和 14 年 (1939 年) に入廠した時には 108 人の職員がいました。当時の日当は 50 銭です。だいたい八日市近辺の人が中心で、女性も 10 人ほどいました。

【宮本さん】

当時、分廠はこのあたりで最高の職場でしたから、ある程度自信のあるものはみな受験したんです。

【小森さん】

一人前になるには 3 年かかりまして、作業帽には年数だけ白線が付いていました。3 年過ぎると雇員という判任官待遇になり、そのうえが技手補、技手となります。

【宮本さん】

分廠は飛行機工場 (機体工場)、発動機工場、整備工場に分かれていまして、新しい飛行機を点検整備したり、運用中の飛行機を定期的に整備することが仕事です。

【Yさん】

新しい飛行機は、発動機をはずして発動機工場で性能点検します。機体工場では送られてきた部品を機体に装着します。これを整備工場を組み立てて、一人前の飛行機に仕上げるんです。整備が完了すると、パイロットが試験飛行します。

【Dさん】

運用中の飛行機はだいたい 200 時間飛行すると定期点検することになってます。

【小森さん】

発動機・機体・計器類など全部バラバラに分解して、それぞれ工場で点検修理します。完了したら整備工場へもってきて組み立て、試験飛行するんです。試験飛行は担当中尉が行い、整備工場のものが同乗

しました。

〔宮本さん〕

飛行場には格納庫が4つあって、一つは分廠整備班の格納庫、あとの3つは戦隊の格納庫でした。

〔宮本さん〕

分廠には、ほかに機械工場・電精機工場・自動車工場・器材庫・鍛工場・守衛所・医務室・高等官食堂・工具休憩所などがありました。

〔小森さん〕

昭和17年(1942年)には各務原支廠からたくさんの工員が移動してきて、発動機工場だけで100人近くが働くようになりました。

〔宮本さん〕

・宮本喜造さん：昭和14年(1939年)入廠、18年(1943年)

現役志願で八日市の第98部隊に入営。

・小森章次さん：昭和13年(1938年)入廠、19年(1944年)

現役で海軍整備学校入隊。

・Yさん：昭和13年(1938年)現役入営、飛行第三連隊整備

中隊配属、18年(1943年)分廠転属。

・Dさん：昭和16年(1941年)現役入営、18年(1943年)

除隊。のち八日市分廠へ入廠。

*八日市分廠には多数の工員が軍属として働き、少数の軍人が統括していました。分廠を出て入営した人のなかには、宮本さんのように第98部隊で整備兵の訓練を受けた人も多かったようです。

【体験談：偕行社（将校の厚生施設）】

Sさん・Oさん・N子さん

父が死去した昭和13年(1938年)、母が偕行社を管理するよう頼まれて、引き受けることになりました。偕行社は翌年夏に完成し、私たちは新築の建物に住み込みました。建物は藤井という人(藤井彦四郎、旧五個荘町出身の実業家)が土地・建物を寄付したものと聞いています。外壁は白のモルタル、赤瓦の屋根で、小学6年生だった私には御殿のように思われました。

偕行社では会議が開かれたり、大広間で宴会が開かれたりしてました。大広間は、美しいガラス窓をはめた板張り廊下で囲まれてました。偕行社の前からは、広い飛行場のむこうに格納庫や兵舎が並んでいるのが望めます。

(昭和)14年の夏と15年の春には、グライダーの練習にきた近畿の中学校の先生たちの宿舎になりました。学校で生徒たちにグライダーを教えるため

です。

(昭和)15年、母が病気になったので、私たちは偕行社から離れました。

〔Sさん〕

偕行社があったのは、いまの近江バス車庫のあたりです。前庭に松などの植え込みがあって、半円形の砂利敷の通路がありました。建物の中央に廊下で囲まれた大広間があって、建物の東端のサロン室には丸いテーブルと玉突き台がおいてました。用務員室にいた外村君は中学校の同級生です。

〔偕行社の賄いをしていた「うを民」のOさん〕

京都の奉公から郷里に帰って、偕行社で働くことになりました。昭和18年(1943年)10月の頃だったと思う。大阪の洋服屋さん一家が偕行社の西端の部屋に住み、私たち10名あまりを使って将校さんの軍服をオーダーメイドで作ってました。建物の東側の隅で作業してまして、軍装品や書籍も売ってました。

好き勝手の注文をつけてくるおしゃれな人がいたり、急によそへ派遣される将校さんが「明日中に仕上げて欲しい」と来はって、徹夜で仕上げたこともあります。その人が出て行かれるときには、涙をこらえながら日の丸を振りました。手をきつく握って「さようなら、また帰って下さいよ」というだけです。余計な会話をするとスパイだと疑われるんです。

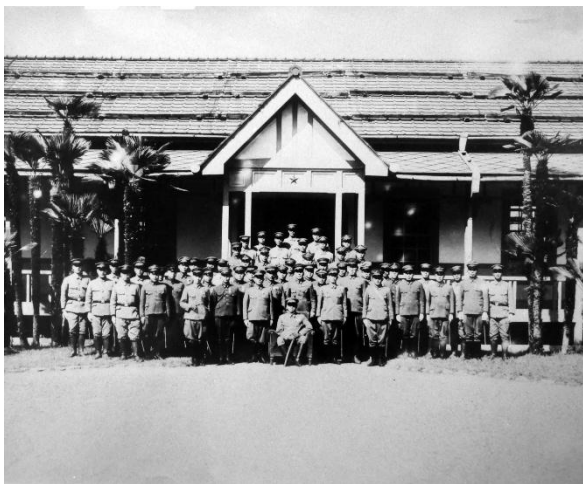
戦争の終わりごろ、縫製作業が中岸本(旧湖東町)、大塚、神田(旧八日市市)へミシンとともに疎開しました。朝からこの3ヵ所を持ち歩いて軍服を仕上げたんです。

〔N子さん〕

*戦後、偕行社は八日市高校農業科の校舎になりました。



『偕行社記事』・『偕行社特報』



偕行社前

〔八日市まちかど情報館提供〕

【体験談：八紘荘（将校宿舎）】

松浦志まさん

八紘荘は昭和 18 年（1943 年）に義父が建てたものです。滋賀県で初めてのアパート経営でわからないことが多く、県会議員の富井さんに力になってもらってました。私が嫁いだのは建った頃です。

部屋は全部で 32、6 畳・4 畳半・二間続きといろいろありました。食堂は 14 畳の二間続きでまん中に長い座り机をならべてました。私と義母が盛り付け、女中さん 2 人が配膳です。お風呂は 6 畳ほどの湯船にシャワーがついてました。トイレは共同です。

泊まっていたのは独身の将校さんで、陸軍士官学校の第 55・56 期の人が多かったと思います。みな空中勤務の人やから、とても身ざれいで品行もよかったです。部屋は当番兵の人が整理して、私らは廊下などの掃除です。

朝夕にサイドカーで送り迎えがありましたが、夜中に電話で非常招集がかかることがあって、その時もサイドカーが迎えに来ました。八紘荘を出るときには首に羽二重を巻いて、頭に無線レシーバー、温熱用電線の入った飛行服という姿です。

将校さんは義父のことを「おじいちゃん」と呼んで慕ってました。義父も息子を出征させていたので（私の夫で結婚半年で出征し、ビルマで戦死しました）、息子に接するようにかわいがっていました。

うちに来た将校さんで、九州や南方へ飛んで行った人は何人もいます。出発前に、「何時に八紘荘の上を旋回して飛ぶから見ていておくれ」と言い残して

いく人もいました。

終戦前には、かなりの数の特攻隊の人たちがやって来ました。6 畳の部屋に 4 人くらいの人が寝泊まりしてました。正気荘（招福楼）でも特攻隊の人たちが泊まってましたが、うちと半分ずつ引き受けたんです。この人たちは突然やってきたので、つながりが薄いんです。あとで聞いたら、終戦直後に琵琶湖に突っ込まれた河西という将校さんも、うちに泊まっておられたことを義父は覚えていました。

戦争が終わると、飛行場を引き上げる兵隊さんの足音が、夜中にもザクザクと聞こえてました。夫の戦死公報は昭和 19 年（1944 年）6 月 20 日付けで、戦後になって来ました。50 回忌の時には、自爆・戦死したお客さんたちのためにも、あわせてお経をあげてもらいました。



八紘荘前の細井巖さん〔細井巖さん提供〕「八紘荘」看板

【体験談：中部第 94 部隊】

T さん

主計将校（会計経理担当の将校）として満洲・朝鮮・ニューギニアを渡ってきた T さんは、昭和 17 年（1942 年）に八日市飛行場の第 104 教育飛行聯隊（通称中部第 94 部隊）に着任しました。

さきに八日市にいた飛行第三聯隊が戦地に転出し、そのあと飛行第四聯隊ができました。この名称が第 104 教育飛行聯隊になり（通称、第 94 部隊）、さらに第四教育飛行隊という名称になりました。この部隊は爆撃機の操縦士の教育が目的でした。第四教育飛行隊（第 94 部隊）は、昭和 20 年（1945 年）3 月に埼玉県熊谷市の児玉飛行場に移動しています。

もう一つ八日市にいた第八航空教育隊（通称、第98部隊）は、同じ航空隊でも地上勤務者（整備等の担当兵）の教育が目的でした。ここで教育を受けた者が、第94部隊のような全国の飛行部隊に配属されるわけです。

第94部隊の構成は「聯隊本部」「第1教育中隊」「第2教育中隊」「整備隊」でした。聯隊本部にいるのは下士官以上のものです。一個中隊は50名程度で、少年飛行兵学校・陸軍士官学校や大学出のものが操縦の教育を受けてたんです。武装していない双発の練習機20機余を保有していて、それは20人くらいが乗れて、便所までついている大きな飛行機です。整備隊はこの飛行訓練を支える部隊で、何百人もの兵隊がいました。

八日市飛行場では、風向きの関係から、南から北、または北西に向けて飛んでました。

格納庫が4棟あって、少し離れて新しい戦闘指揮所（ピット）がありました。2階建てでそこから飛行場全体が展望できました。各階に2室ずつあって、聯隊長はいつも2階左側の部屋、反対側の部屋には聯隊長副官などがおり、1階では連隊本部の事務所でした。

練習機はしばしば墮落室に失敗してまして、飛行場と八風街道の間の高さ1mあまりの土手を突き破って街道まで飛び出したことがありました。私が連隊長に「どうしたんでしょう」というと「要するに操縦が下手なんだ」と言われました。

冬になると八日市飛行場は雪が降ったので、熊本、菊地飛行場や静岡の浜松飛行場へ転地演習に行くんです。双発練習機10機くらいに皆が搭乗し、3〜4週間という大々的な演習でした。

【体験談：中部第98部隊】

Kさん ほか

昭和16年（1941年）に現役徴集を受け、第98部隊に入隊しました。この部隊は航空隊の地上勤務に必要な基礎教育を行う部隊です。ここで特業の訓練を半年受けたあと各部隊へ配属されるんです。私は写真班になり、そのあと第93部隊（八日市飛行場にいた飛行第三聯隊のこと）に配属されました。

写真というのは、高度2500mの偵察機から双眼写

真機で撮った写真をもとに地図を作るんです。たとえば、写真から煙突の太さ・高さを測量して、何の工場と推定するんです。機関銃の射撃訓練の成績判定する資料も写真です。 【小学生時代に自転車で飛行場祭りの見物に来ていたKさん】

昭和16年（1941年）2月、牡丹江から八日市へ移駐した第八航空教育隊（第98部隊）とともに八日市へ赴任してきて、蓄電池・野外発電・着陸場照明機の教官をしていました。藤田鉄工所の宿舍や立石の散髪屋などに下宿しながら、自転車で通いました。

第98部隊は、はじめは2個中隊（1個中隊は150名）でしたが、やがて増員されるようになりました。新兵は半年に一回の入営だったのに、（昭和）19年（1944年）末ごろからは毎月新兵が入営してくるようになりました。終戦時には9個中隊に増えていました。兵舎もこのような増員に対応するために、一段ベッドから二段ベッドに改造されました。

【Qさん】

昭和18年（1943年）3月で八日市分廠をやめて現役志願し、第98部隊に入隊しました。3ヵ月の教育期間のあと整備班に回されたのですが、分廠でやっていた仕事と同じなので楽なものでした。伍長に進級すると、機付長になります。2人の整備兵とともに一つの飛行機に専属する役割です。操縦士も特定されてますし、飛行機とともに移動もするんです。

【分廠にいた宮本喜造さん】

昭和19年（1944年）4月に陸軍航空特別幹部候補生に志願し、故郷の熊本から第98部隊に配属されました。ここには9個中隊ありまして、1個中隊は300人程度ですから、少ないところがあつたとしても2500人くらいはいたことになります。私よりあとは、現役徴集兵が1〜2ヵ月で転属していきましたから、完全な特業教育はできていなかったと思います。各中隊の教育分野は、飛行機の機種や電気・写真などに分かれていました。

【Hさん】

【体験談：憲兵隊八日市分遣所】

Tさん

昭和19年（1944年）4月10日に現役で入隊。2ヵ月半の歩兵教育のあと憲兵試験を受けまして、（昭和）

19 年 11 月末に八日市分遣隊勤務となりました。当時の分遣隊には隊長をはじめ憲兵曹長 2 名、軍曹 1 名、伍長 2 名の 6 名がいました。

軍人は一般人とはちがう刑法を適用されますので、軍には一般の警察の力が及びません。憲兵だけが陸海軍の司法警察権を持っていたんです。しかも、必要なときには一般民間人を拘束することもできたんです。

延命新地の検番（花街の事務所）で娼妓の罹病検査に立ち会う仕事もありました。検査には陸軍病院から軍医が出むくんですが、検査があまくならないよう監視したんです。花街へ遊びに出かけた兵隊が性病にかかっている使用のものにならないので、きびしく検査する必要があったんです。

八日市飛行場に空襲があったときに、日本機の迎撃でグラマン 1 機が平田（現東近江市）に不時着したことがありました（昭和 20 年（1945 年）7 月 25 日）。駐在所の手におえないと電話があつて、憲兵 2 人が現地へ行き、米兵をサイドカーに乗せて連れて帰ってきました。

米兵の気持ちがやや落ち着いたところで、八日市中学校の英語の先生を通訳にして取り調べをしましたが、米兵が「ロバート少尉」であるとはわかりません。翌日、大津憲兵隊へ引き渡すトラックを待つあいだに、近所の人が押し寄せてきました。「米兵を殴らせてくれ」と叫ぶ人もありましたが、分隊長から「捕虜には絶対に触らせるな」と命令されました。

戦後、このことで MP（進駐軍警察）から厳しく追求されました。分遣隊の責任は問われませんでした、彼はどこかで処刑されたのかもしれませんが。

***実際は、捕虜の名は「ハーバート・ローウィ少尉」で、戦後フロリダ州へ帰還しています。**

終戦直後、伊庭（旧能登川町）にあった捕虜収容所が解放され、元捕虜たちが家の戸を叩き回っているという連絡がありました。分遣隊からも 5～6 人が出動しましたが、もう憲兵には何もできません。どこかへ押し入ろうとする元捕虜を身体で押し止めるくらいしかできなかったらしいです。

戦後、すべての憲兵は 6 年間の公職追放を受けました。選挙権もなく、勤め先を変えると市役所へ届

けなければなりません。なかなか定職に着けませんでした、昭和 26 年（1951 年）の追放解除でようやく八日市町役場に勤めることができました。

【体験談：八日市に待機した特攻隊】

細井 巖さん ほか

招福楼が正気荘（将校宿舎）になる少し前、特攻隊長と新妻がしばらく暮らしておられたことがあります。出撃前にある将官が娘さんをあげたのだと聞いています。うちで結婚式をあげられたあと、何日か奥の部屋で暮らして、隊長は出撃してゆかれました。

【招福楼の N さん】

特攻隊の人たちはいたや旅館に宿泊されてました。若い特攻隊員は首に白いマフラーを巻いていたのですぐにわかります。ガソリンで飛行機を拭いていると、操縦席で人の気配がありました。その人は少し年長で妻子があり、一人で涙をこらえているらしい、ということでした。その情景は今でも忘れられません。

【第 98 部隊の整備兵だった寺井善七さん】

八日市から特攻隊が飛び立つのを見送りました。97 式という廃機同然の古い飛行機で、ボルトが締まっているのに油がポトポト漏れてくる代物でした。500kg 爆弾を装着していますが、はずす仕掛けがありません。一度飛び立ったら一定高度まで上がるだけで、それより上がれないし着陸もできない。爆弾だけがやけに大きく、飛行機が小さく見えました。私たちは一生懸命手を振って見送りました。

【分廠に勤めていた D さん】

飛行場の北よりにテントが張っており、そこが特攻隊のピット（訓練待機所）になってました。八日市の航空隊とはまったく交渉がありません。

私たち二宮隊（特攻隊）の 6 名は五個荘金堂のお宅の離れに寝泊まりしていました。部隊は目的達成のために一糸乱れぬ行動をとらなければならないので、常に隊長・隊員の気持ちや意思を察知できる、打てば響くようなチームワークを作ることが大切なんです。死とか家族とかは、頭の中にまったくありませんでした。

【特攻隊員だった福永英三さん】

学徒兵は営内居住が原則ですが、私たちは特攻命令を受けていたので八紘荘に下宿させてもらいまし

た。八日市にいた特攻隊は9 隊 54 機 50 名（4 名は未着任）。待機特攻隊といいまして、沖縄が陥落して沖縄特攻が中止となったので、本土決戦の特攻隊として八日市に待機していたんです。

玉音放送は聞きとれませんでした、戦争で命を失うことはなくなったと認識しました。八日市にいた河西少尉は琵琶湖へ突っ込んで殉職、西川中尉は故郷の浅間山に突入しました。生き延びたという反面、あとに続く者あるを信じて逝った戦友とのあいだの葛藤。戦後、彼らの分まで一生懸命尽くしてきましたが、割り切れない気持ちです。

【特攻隊員だった細井巖さん】

飛行場の拡大

中国大陆への侵出がはじまると、八日市飛行場の部隊も人員を増強して中国へ派遣しました。飛行場祭りは中断され、飛行機を印刷した絵はがきは見られなくなりましたが、逆に軍への関心は戦争によって高まり、多くの見学者が押し寄せ、航空献金が寄せられたといいます。

アジア・太平洋戦争の形勢が悪化しはじめると、飛行兵と整備兵を大量養成することが緊急課題となり、八日市を本拠とする飛行第三戦隊が樺太へ移駐したかわりに、飛行士と整備士の教育部隊が入ってきました。飛行士の消耗が激しくなり、やがて飛行場の教育部隊には大量の新兵が送り込まれるようになりました。

飛行場の周辺には、八日市分廠への勤労働員、訓練の支障となる民家や立木の除去、駐屯将兵へ宿舎の提供といった協力が命じられ、住民は苦しい生活の中でそれに応じました。部隊の増加と飛行機の大型化にともなって飛行場を拡大することになり、高圧的な買収にも応じざるをえませんでした。

八日市の街が官民を挙げて誘致し、地域の発展に大きく寄与した八日市飛行場は、戦況の悪化がすすんだことによって、地元住民の生活基盤を奪う元凶となってしまったのです。

【体験談：飛行場の拡張】

Tさん ほか

昭和9 年（1934 年）に兵役につきましたが、父か

ら聞いた話では、（昭和）15 年ごろから飛行練習が激しくなったようです。飛行機が飛び立つコースにあたっていたわが家は、はじめは「屋根に赤いランプをつけよ」との命令でランプをつけていましたが、それでも邪魔になるということで、憲兵命令で（昭和）16 年に立ち退き移転しました。

【表門前の奥村屋のTさん】

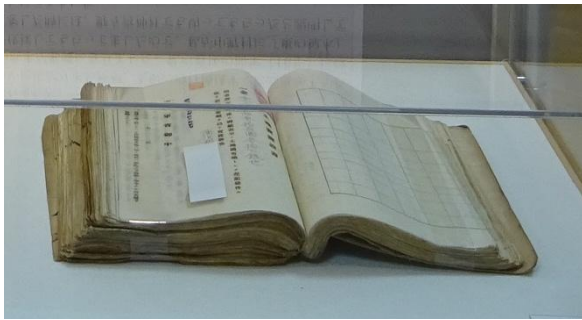
飛行場近くの今崎・今堀の神社の森が、飛行機の離着陸の邪魔になるということで、それぞれ100 本ずつくらい伐採することになりました。自分が愛知川の業者を連れてきて伐採作業に従事しました。大量の杉を馬車で運んで木材にしようとしたのですが、材質に問題があって使用できませんでした。こんなわけで、今崎・今堀の神社の杉はみな戦後に植林したものです。【軍用機製造の下請け工場になった大正製綿のFさん】

飛行機が大型化し滑走路が狭くなってきたので、（昭和）19 年（1944 年）から飛行場の拡張を行いました。玉緒村の柴原南・柴原の田んぼが大半です。私は買収交渉にかかわっていませんが、ある意味有無をいわさない買収で、文句を言うものは「国に協力しないのか！」と怒鳴られてしまう状態だったと思います。ずいぶん恨まれたと思います。人は集まらなかったし、道具はツルハシや鍬でしたから、工事は遅れました。

飛行場は倍くらいに広がりましたが、大型の飛行機はすぐに高度が上がらないので、周辺の高木が邪魔になりました。私の着任の前年（昭和16 年）には野々宮神社の杉を伐採してもらったので、私が中野村に「東の椋木」の伐採の申し入れをした時には、野々宮神社でも切ってもらったと説明して了解してもらうことができました。

【第94 部隊の主計将校だったTさん】

* 飛行場の拡大は、実際には昭和16 年（1941 年）に開始。南辺の蛇砂川を付け替えて拡張する計画でしたが、揚水機場の移転には地元の反対があり、食糧増産の時世から軍側もこれを押し切ることはできませんでした。このため、揚水機場を避けて拡張した飛行場の南縁（蛇砂川）は、蛇行することになりました。



「登記済証書綴」 飛行場拡張時の売渡証書が綴られています。



パナー写真:艦載機機影

〔個人提供〕

第3章 八日市の空襲

八日市の空襲

滋賀県で空襲の被害を受けたのは、昭和 20 年 (1945 年) 5 月中旬から終戦までのあいだでした。とくに 7 月 24 日・25 日・28 日・30 日の 4 日に被害が集中しています。

米軍資料によると、この 4 日間に米軍艦載機は県内所在の軍事施設・軍需工場・列車に対して攻撃したと報告しており、4 日とも八日市飛行場に攻撃をおこなっています。5 隊にわかれた米軍機は入れ替わりながら空襲したので、一日に 3 度も空襲を受けた日がありました。

しかし、第一復員省(もと陸軍省)が作成した「戦災概況図」には八日市の空襲被害に関する記述がなく、体験者の証言は周辺部の被害に限られるため、飛行場の被害の実態はよくわかっていません。

7 月 24 日 早朝

「飛行場内の施設・飛行機・場外の退避飛行機を攻撃」 御園国民学校で兵士 1 人・児童 1 人、御園村で

児童 1 人死亡。

7 月 25 日 早朝

「米軍機の空襲に対し、第 244 戦隊が迎撃。米軍機 2 機行方不明」 迎撃した日本機の 1 機が体当たりし、1 機が地上障害物に触れ墜落。

朝

「飛行場施設・飛行機・退避飛行機を攻撃」

建部で軍用トラックの攻撃に巻き込まれた教員が 1 人死亡。

昼前

「飛行場の飛行機を攻撃」

小脇でロケット弾の着弾により夫婦が死亡。

7 月 28 日 朝 「飛行場の飛行機を攻撃」

昼 「飛行場の飛行機を攻撃」

7 月 30 日 朝 「八日市の工場と列車を攻撃」

旧永源寺町石谷で児童 2 人死亡。八日市駅の空襲はこの日か？

*各日上段の「」内は米軍資料、下段は体験談等による。

【体験談：八日市の空襲】

I 子さん ほか

【7 月 24 日】

最初の空襲は警報もなく本当に突然でした。鈴鹿方面からたくさんの機影が見えたので、グラマンだと知らず眺めていたら、飛行機は太郎坊山方面に飛んでから急旋回して飛行場にむかって来ました。そして機銃掃射。護岸工事中の尻無川の中に飛び込みましたが、本当に怖かったです。飛行機はガソリンを抜いてあったので銃弾を受けても火災を起こしませんが、曳光弾があたった 1～2 機は燃え上がりました。

【分廠にいた D さん】

防空壕へ入ろうとしたその時、すぐそばにロケット弾が落ち、気がついたら陸軍病院の前へ運ばれました。弟は爆弾の破片を横腹に受け、肛門から腸が飛び出す重傷でした。痛みを感じないらしく、やがて母と私の手を握ったまま息を引き取りました。気がついたら私も目の前が真っ白になって、目が見えなくなっていました。

【御園の I 子さん】

【7 月 25 日】

八日市飛行場上空で、アメリカ軍機の飛行機めがけて日本軍機が体当たりしたんです。操縦士は直前

に機体から飛び出して、落下傘が開きました。米軍機はそれめがけて機銃掃射したんで、操縦士は腰を「く」の字に曲げて落下しました。小原大尉は、はじめから当たるつもりだったと思います。

〔Hさん〕



*写真は東近江市中里にある小原大尉の墓碑。

〔7月30日〕

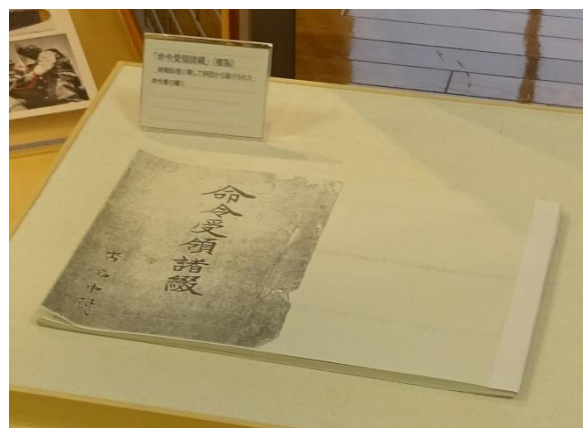
私の子ども、久司（9歳）と忠男（4歳）はラジオ体操から帰ってくるところでした。戦闘機が急降下してまして、「早よう入り」と叫んで2人が家に入ったとたん、バリバリッと音がして2人が引っ繰り返りました。血みどろで倒れていた忠男は即死。久司は医者へ運んだけど、途中で息が絶えたとか。

2人の子どもが死んでしもてから、農作業してても、いつのまにかボウツとしてたことが何度もありました。

〔旧永源寺町石谷のY子さん〕



掩体壕模型 東近江戦争遺跡の会 山本孝志氏作成



「命令受領諸綴」（複製）

終戦処理に関して師団から届けられた命令書の綴り

【体験談：飛行機と分廠の疎開】

O子さん ほか

昭和19年（1944年）暮れごろから飛行機を隠しはじめてます。駐屯部隊も外部に分散するようになり、（第98部隊の）私の中隊も西押立国民学校に移駐していました。私は川合寺の将校官舎から中隊のようすを見にいたり、妙法寺の松林に隠した特攻機の整備に行ったりしていました。八日市インターチェンジ付近の松林にはたくさんの飛行機を隠しましたし、御園の墓地に隠したのもありました。

〔第98部隊にいたQさん〕

先代から酒造業を営んでおりましたが、昭和18年（1943年）ごろには酒造米も入らなくなったので休業しました。そこへ（昭和）19年暮れか20年はじめごろ、うちの倉庫に八日市飛行場から飛行機が大八車にのせて運び込まれました。二人乗りの練習機です。飛行機は布張りの粗末なもので、こんなんでは勝てるんかいな、と思いました。倉庫には鍵をかけられてしまい、家人でもなかへ入れませんでした。

〔旧愛知川町で酒造業を営んでいたO子さん〕

分廠にいたときにはキ102というB29の襲撃機を整備してましたが、そのあとドイツのユングマンからライセンス製造していた飛行機が来ました。これは翼をはずして胴体を愛知川町の醤油屋の倉庫へ納めました。（昭和）20年（1945年）6月ごろです。これを整備するのに愛知川へかよいましたが、最後は自動車で行って、その帰りは飛行機の操縦席のって牛に引っ張らせて飛行場へもどってきました。

* ユングマンの飛行機：二人乗りの複葉練習機

〔分廠に勤めていたSさん〕

分廠は（昭和）19年（1944年）ごろから分散疎開するようになりました。われわれが働いていた発動機工場は、まず飛行場に隣接した玉緒村尻無へ引っ越しました。毎日、分廠から整列してかようんです。しかし、ボイラーは運び出せなかったもので、いちいち分廠に戻りました。次に接收した能登川町須田の工場へ移りましたが、ここにはボイラーがありました。さらに戦局が厳しくなると、安土町の腰越の穴に移りました。穴掘りには朝鮮半島の人々が従事していました。入口は一つで、中は縦横にトンネルが掘ってありました。トンネルでは水滴が落ちるので発動機にシートをかけて帰りましたが、翌朝には赤さびが浮いてました。

〔分廠に勤めていたKさんとSさん〕

（昭和）20年（1945年）ごろには五個荘の淡海女学校・武佐・市辺・前山（布引丘陵）に疎開してます。私は兵器事務所で在庫管理の事務をしてましたが、疎開後は前山の壕の中に机といすを置いて仕事をしてました。

〔分廠に勤めていたR子さん〕



パナール写真：終戦後八日市飛行場で焼却される飛行機

〔個人提供〕

第4章 戦争の終わり

飛行場の開拓

終戦の翌日から9月はじめに分宿していた兵隊の復員が行われ、兵器と飛行機は10月上旬に米進駐軍へ引き渡されたあと、飛行場で燃やされました。

飛行場の財産は大蔵省に移管されましたが管理が行き届かず、廃材などを持ち去ってモノ不足の戦後生活に役立てる人もいました。

飛行場は希望者に割り当てて開拓することにしたが、もともと農地に適さず、飛行場として地面を固めていたため、開拓にはたいへんな苦勞がありました。



奥：ジュラルミン製箕・火鉢

手前：ジュラルミン製飯盒・急須・筆箱、プロペラ転用灰皿

【体験談：飛行場の最後（その1）】

寺井善七さんほか

終戦により、兵はみないなくなった。98部隊では隊長以下現役将校10名で終戦処理にあたりました。将校でも幹部候補生から任官した予備将校はすぐに帰郷し、処理に残ったのは士官学校などを卒業した職業軍人です。 【第98部隊の将校だったQさん】

8月20日ごろ、分散駐屯先からもとの部隊に戻れと命令がありました。復員の話が出たのは9月2日です。それまでは完全武装です。中隊の機密書類は全部焼却しました。衛庭で復員式をしたあと解散しましたが、「若年者・独身者・近隣者は武器引き渡しの事務のため残留してくれ」と話があり、終戦の日に兵長へ昇任していた私は残ることになりました。

管理要員は3、4班に分かれ、1班は下士官1名、下士官勤務者2名、上等兵15名ほどの約20名でした。私はほうぼうへ分散保管していた被服類を回収してまわりましたが、農家の倉庫に置きざりになったのもあったと思います。兵器・銃・被服などが格納庫に積み、飛行機40～50機が外に並んでました。これらの監視のために、管理班が交代で歩哨に

立ちました。

米軍が来たのは10月はじめ。正式調印がすむまで武装して階級章もつけていました。双方対峙するかたちで監視を続けました。任務を終えて帰郷したのは11月中旬で、3か月分の報酬600円をもらいました。【第98部隊の下士官だった寺井善七さん】

進駐軍に引き渡す10月末まで、臨時憲兵として警備に残りました。進駐軍が入ってしばらくは米兵といっしょに番をし、焼きいもを食べたりしました。特に親しくしたわけではないですが、米兵は愉快的な兵隊たちでした。【分廠の整備兵だったYさん】

10月末くらいに米兵の上官が来て場内を見てまわりまして、私たちもついて歩きました。こうして警備の仕事が終わり、みんなとは遅れて復員しました。兵舎の縁の下には持ち帰れなかった軍服や毛布がたくさん押し込んであって、分け合って持って帰りました。モノ不足の時代でしたから、帰ってから食糧と交換するのに大助かりでした。

【第98部隊の整備兵だったHさん】

【体験談：飛行場の最後（その2）】

Uさん ほか

分廠長は「アメリカに引き渡すぐらいなら飛行機部品を持ち帰れ」と言っていたそうです。八日市の自転車組合は、飛行機の予備のタイヤを払い下げてもらって、リヤカーのタイヤになったと聞いてます。御園若松に墜落して放置された飛行機は、ガソリンタンクに巻いたゴムを取り外すのに打ち壊されました。このゴムは草履に再生されたそうです。飛行場を開墾していた時には、コンクリート誘導路に並べた飛行機が燃やされているのを見えています。

【分廠に勤めていたSさん】

戦後、あちこちにおいていた飛行機は、あつというまにいろいろな部品が盗まれました。民間では使えそうにない計器をはじめ、どうやって取り外したのか、タイヤまで盗まれていることもありました。

【分廠にいたDさん】

八日市へやってきたアメリカの進駐軍十数名は、偕行社で寝泊まりしていました。住友から飛行機の解体にやってきて、近所の人を使って作業を進めていました。責任者の方はうを民に下宿してます。家

ではジェラルミンの翼を2、3枚もらって、家のひしに使っていたことがありました。

【飛行場表門前の「うを民」のOさん】

昭和21年(1946年)2月に町役場から飛行場跡の財産監守に来てくれないかと誘われて、大蔵省の出先機関に1年ほど勤めました。旧戦闘指揮所で寝泊まりし、2交代でパトロールしました。たしか住友金属の人やったと思いますが、飛行機の残骸の払い下げを受けて、ジュラルミンやゴムを集めてました。戦後、ジュラルミン製の自転車や鍋が出回りましたが、こういう形で使われたんやと思います。

農地開発営団のあっせんで飛行場跡に入植した人が30～40世帯、兵舎を区切って暮らしていました。飛行場の無線等は小浜漁業組合が持ち帰っています。98部隊の兵舎では明治製菓が一時操業していて、そのあと玉園中学校が購入しました。94部隊の建物ではパルプ工場が操業していたと思います。

大蔵省の事務所があった憲兵隊の建物は、そのあと愛知川土地改良区が使用するようになりました。

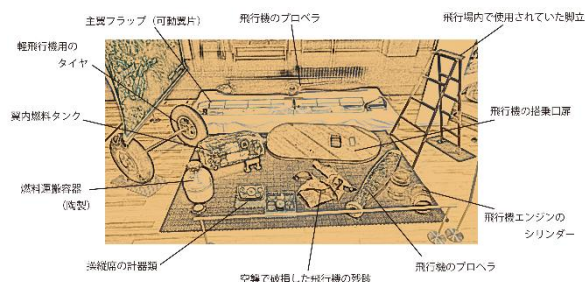
【Uさん】



飛行場で拾得された飛行機などの部品と残骸

砲雷が甚強降され、飛行場が陥没されると、飛行場に残されたすべての財産は大蔵省に移管されました。しかし、飛行機や軍需物資は分散保管しており、すべて回収されたわけではなかったようです。また、飛行場内でも管理が行き届かないところがあったようです。モノ不足に悩む周辺住民は、さまざまなモノを持ち帰って、生活用品をおぎなっていました。

青地農夫さん・武村友幸さんほか提供



(令和8年7月編集)

第16回企画展示「八日市 いまむかしー飛行場があった街ー」(会期:平成29年1月11日～4月23日) 展示資料一覧				
プロローグ 八日市 いまむかし				
No.	資料名	点数	資料説明	提供者名
1	翫風号模型	1	沖野ヶ原の翫風号試験飛行100周年(2014年)に安田晴彦先生が制作、小学校へ寄贈された模型です。	東近江市立八日市南小学校所蔵
第1章 陸軍八日市飛行場				
2	飛行場で使用されていた鬼瓦	1		西川利秀さん提供
3	風呂敷「八日市飛行隊」	1		個人提供
4	タオル「除隊記念 八日市飛行隊」	1		個人提供
5	「土地買収二係ル書類綴」(複製)	一式	陸軍八日市飛行場建設時の買収記録、大正9年	個人提供
6	「飛行第三聯隊参観の栞」(複製)	一式	飛行第三聯隊酒保発行	個人提供
7	『八日市と飛行場』(複製版)	1		個人提供
8	絵葉書袋「八日市飛行場 地鎮祭記念絵葉書」	一式	滋賀県発行	川崎清道さん提供
9	飛行場地鎮祭の絵葉書	1	大正9年6月1日八日市陸軍飛行場地鎮祭記念、工事着工を祝って、八日市の街からくり出した山車の写真	個人提供
10	「八日市鉄道沿線案内」(複製)	1	八日市鉄道・永源寺自動車発行	近江鉄道株式会社提供
11	「八日市鉄道列車時刻表」	1	昭和11年8月5日改正、八日市鉄道株式会社発行	祐耆(ゆうき)明人さん提供
第2章 飛行場がある街				
12	「近江八日市町絵葉書」	一式	発行元 近江紙文具合資会社	個人提供
13	八日市飛行場関連絵葉書(各種)	一式	「飛行第三聯隊絵葉書」・「飛行第三聯隊空中写真絵葉書」・「航空第三大隊工ハガキ」・「飛行第三聯隊絵葉書」・「原色版帝国軍用飛行機」・「飛行第三聯隊空中写真絵葉書」など	個人提供
14	戦中戦後の髪型(ウィッグ)	一式	翼賛型1号・2号・3号、震災刈り	戸嶋吉明さん提供
15	飛行第三聯隊除隊記念 徳利・盃	一式		個人提供
16	創立記念盃	一式		個人提供
17	将校が下宿に残した書籍	一式		個人提供
18	旗「飛行第三聯隊御用達組合」	1		個人提供
19	日野屋酒店看板	1	「大日本優等清酒」「醸造元 近江国神崎郡御園 喜多儀左衛門」	麻原久子さん提供
20	一升徳利	1		麻原久子さん提供
21	三升徳利	1		麻原久子さん提供
22	飛行せんべい箱ラベル	一式		個人提供
23	せんべい焼き型	一式		個人提供
24	一二三堂の菓子型	3	襟章、鉄兜、表門	個人提供
25	『偕行社記事』	一式		個人提供
26	『偕行社特報』	一式		個人提供
27	「八紘荘」看板	1		松浦志まさん提供
28	「登記済証書類」	1	飛行場拡張時の売渡証書が綴られています。	苗村増和さん提供
第3章 八日市の空襲				
29	掩体壕模型	1		東近江戦争遺跡の会 山本孝志氏作成
30	「命令受領諸綴」(複製)	1	終戦処理に関して師団から届けられた命令書の綴り	個人提供
第4章 戦争の終わり				
31	ジュラルミン製箕	1		個人提供
32	ジュラルミン製飯盒	1		個人提供
33	ジュラルミン製急須	1		個人提供
34	ジュラルミン製筆箱	1		個人提供
35	ジュラルミン製火鉢	1		個人提供
36	プロペラ転用灰皿	1		個人提供
37	飛行場内で使用されていた脚立	1	飛行場で拾得された飛行機などの部品と残骸	青地農夫さん・武村友幸さん ほか提供
38	飛行機の搭乗口扉	1	飛行場で拾得された飛行機などの部品と残骸	
39	飛行機エンジンのシリンダー	2	飛行場で拾得された飛行機などの部品と残骸	
40	飛行機のプロペラ	2	飛行場で拾得された飛行機などの部品と残骸	
41	空襲で破損した飛行機の残骸	一式	飛行場で拾得された飛行機などの部品と残骸	
42	操縦席の計器類	一式	飛行場で拾得された飛行機などの部品と残骸	
43	燃料運搬容器(陶製)	1	飛行場で拾得された飛行機などの部品と残骸	
44	翼内燃料タンク	1	飛行場で拾得された飛行機などの部品と残骸	
45	軽飛行機用のタイヤ	1	飛行場で拾得された飛行機などの部品と残骸	
46	主翼フラップ(可動翼片)	1	飛行場で拾得された飛行機などの部品と残骸	